

「わたしたちは華人ではない」 —ベトナムの華僑政策と北部農村に住むガイの現代史—

伊藤正子

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授)

第1章 はじめに

ベトナムには、国家が公認する 54 の民族が存在することになっている。多数派を占めるキン（ベト）人と 53 の少数民族から成るとされ、特に少数民族は、その文化や暮らしが博物館やテレビ番組で展示・紹介されたり、かれらが集う定期市や住居が国内外からの観光客の集まる目玉スポットになったりしている。しかし、そのような少数民族のなかで、ベトナム人研究者によってそれほど研究されていないのが、「華人」であり、さらにほとんど研究されたことがないのが、漢族系とされる「ガイ(Ngái)」である。人口は 1035 人（2009 年人口調査）とされている。北部では、タイグエン、バツカン、カオバンなどに広く分布していることになっている。

ガイとは客家語の「私」の意味で、ベトナムのガイも客家系の集団と推測される。Ngai には「艾」の字があてられることが多い。しかし言語は方言差程度の違いであるにもかかわらず、サイゴンなど都市に多くいる客家と同じと見なして「華人」のカテゴリーに含めることなく、華人とは別の民族「ガイ」という範疇が 1979 年の民族分類決定の際に設定された。

筆者は今から 13 年以上前の 2003 年に当時のベトナムの民族学研究所所長だったコーン・ジエン(Không Diễm)氏に「ガイは今何人くらいどこにいるのか」と尋ねたことがあったが、「かれらは中国へ行ってもういない」とつれない返事をされ、それ以上とりあってもらえなかったことがあった。またその 3 年後、北部のタイグエン省にあるベトナム民族文化博物館を訪問し、博物館スタッフで民族学者のジエップ・チュン・ビン(Diệp Trung Bình)氏と懇談した。ビン氏は「自分こそがガイを一民族として分類したのだ」と発言し、翌日タイグエン省内のガイの居住地に連れて行ってくれるという約束をしたが、翌日午前中ずっと携帯電話の電源を切って連絡を断ち、約束を反故にした。これらの事実から、筆者は、ガイという人々がベトナム人研究者にとってある種タブーになっていることを感じ取った。

2015 年になり、ドイモイ後ベトナム人の人類学者のなかで最初に西側（オランダ）で博士号を取得したハノイ大学のグエン・ヴァン・チン教授の理解と協力を得て、ガイの居住地であるタイグエン省とバクザン省で現地調査をすることが可能となった。本報告は、この調査をもとに、ガイとはどういう人たちなのか、なぜほとんど研究されてこなかったのか、かれらはどのような歴史をたどってきたのかを明らかにすることを目的とする。それを通じて、ベトナムの華人に対する少数民族政策と、中国という対立する

国家にルーツを持つ人々が、生きる生きづらさについて、考えてみたい。

第2章 先行研究 – ガイとは誰か –

ガイについての最初の日本語による研究として、古田元夫の『ベトナム人共産主義者の民族政策史』[1991]が挙げられる。古田は同著の中の数節でガイについて触れているが、越北連区の党委員会支部の資料とベトナムの民族学者の論文に基づき以下のように述べている。

ハイニン省（現在のクアンニン省…筆者注）にはガイ(Ngai)と呼ばれる民族が居住している。彼らはハイニンと境界を接する広西省の防城県出身の漢族系の集団で、抗仏戦争のころの人口は約10万人ほどであったⁱⁱ。ベトナムにかなり以前に移住し、農村地帯に居住して周辺のキン族やヌン族とあまりかわらない生活をしていた彼らは、都市を中心に形成されていた華僑の幫に参加せず、都市に住む華僑を「流民のガイ」と呼んで自分たちとは区別していた。フランスはこのガイのような集団を、「ヌン」として一括していた。そしてインドシナ戦争期に、ベトミン軍と対抗するためにフランスは東北地方にバ・サンを首領とする「ヌン自治国」を樹立したがⁱⁱⁱ、それを支えた基盤はガイなども包摂した、「華僑」でもないが「ベトナム人」でもないという意味での「ヌン」だったわけである[古田 1991:428-429、Nguyễn TrúC Bình 1973:96, Việt Bang, Diệp Trung Bình, Thi Nhi 1979:6]。

つまり、ガイは一時期「ヌン」の範疇に入れられていた。

また客家研究者の河合洋尚は、現地調査をふまえて「ベトナムの客家に関する覚書—移動・社会組織・文化創造」と、聞き取り調査の結果などを拡充した「ベトナム客家の移住とアイデンティティ—ンガイ人に関する覚書—」の二本の論文を著している。河合は、かれらの移住先とされるホーチミン市、ビエンホア市、中国側の華僑農場で調査を実施するとともに、1954年に南北分断が決まった際、社会主義政権を嫌って南に移住しようとしたガイたちの集結地だったハイフォンでも（ガイはいないものの、他の華人たちに対して）インタビューを行っている。

その結果、客家と対比して、ガイの出自、移住、分布について以下の説を提示している[河合 2014a:95-97]。かれらの祖先の多くは、ベトナムに接する広西省防城港から、ベトナム領へ仏領期に移住しており、なかでも防城港の那良鎮と那梭鎮をルーツとする者が多い。ベトナムでは中国と接するクアンニン省を根拠地にしてきたが、南北分断時の1954年に多くがハイフォン経由で南部に移住していった。さらに中越関係が悪化してからは、1979年以降、ベトナム東北部に居住していた大半のガイは、ベトナムを離れ、祖国である中国に戻った、あるいは「アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに流出」したと言う。つまり、1954年に南部に移住した者たちのうち、「少数が南部に留ま

っているが、ガイの根拠地であったベトナム東北部にはもういない」というのが、移住についての河合の結論となっている [河合 2014a:97]。(河合は、「ンガイ人」としているが、本報告書では表記は「ガイ」で統一した。)

しかし、これにはベトナムの民族別人口統計の数字をそのまま正しいものとして解釈し、ハイニン省に居住していたガイだけを「ガイ」と認定したために起こった誤解が含まれている。ガイは、フランスがハイニン省に 1947 年に設立した「ヌン自治国」の主要な住民であったが、ガイはクアンニン省だけに住んでいたのではなかった。ベトナム東北部の広い地域 (バクザン省、タイグエン省など) にもかなりの規模で居住していた (いる) が、「ホア (華人)」に分類されている。確かに「ヌン自治国」に居住していたガイの多くは 1954 年に南部に移住し、残っていた人々も 1978-79 年に中国に帰国した。ハイニン省に限れば、河合の解釈は正しい。しかし、バクザン省や革命の根拠地に近かったタイグエン省には、現政権の革命に当時協力したガイも数多く、54 年に南に渡ることなく、また 78-79 年にも居残った人々が現在でも相当な規模で居住している。かれらは現在、「私たちは華人ではない」として、ガイへの民族籍の変更を求めているが、本人たちの訴えにもかかわらず、「ホア」つまりは華人と認定され、民族名を変更できずにいる。詳しくは第 4 章で詳述する。

河合は、ガイを客家のサブグループ、あるいは客家に含まれる人々と捉え、それなのになぜ、ベトナムではガイが別の民族として分類されているかについても検討している。それはガイと客家は、ルーツ、言語などに違いが見られるからである。ガイのルーツは先ほど述べたが、客家のルーツは広東省東部や中部の者が多く、移住時期は 19 世紀末から 20 世紀前半が多いと言う。また古田が指摘しているように、ガイは農村に居住する農民であって、都市の客家とは連絡がないという居住環境もガイが自分たちを客家とは区別する理由の一つであろう。筆者自身の聞き取りでも、ガイは客家語を聞いて理解できるが発音が異なると証言していたので、方言程度の違いだが、ガイとは「言葉が異なる」という認識もある。

以上、ガイをメインにして書かれた主な先行研究を紹介した。しかし河合の先行研究は、文化人類学的研究であるため、かれらがどのような歴史を生きてきたかについては具体的に触れていない。また古田の著作は歴史研究であるが、現地調査が行えるようになる前の著作のため、ガイの人たちの生の声を聞きとっていない。したがって筆者は、オーラルヒストリーを手法として、かれらの具体的な経験を描き、北部ガイの苦勞の多かった歴史を 20 世紀から現在にいたるスパンで明らかにしたい。

第 3 章 ベトナムの華僑・華人政策の推移

まず、ベトナムの華僑・華人政策の変遷を古田[1991]によって概観し、華僑・華人と密接な関係にあるガイが置かれてきた歴史的背景をたどっておく。本報告書では便宜上、中国の国籍を維持している者を華僑、ベトナム国籍を取得している者を華人とする。華

僑は仏植民地支配下においては、「外国人」として扱われてきた。また、ベトナム国籍になった後も、ベトナムの各少数民族のなかで、華人はその存在や地位が、隣国の大国中国とベトナム国家との関係に左右されるという意味で、最も特殊な存在であると言ってよい。

まず華僑政策の枠組みだが、当初フランス植民地統治下では、華僑の法的な地位を確定した 1871 年の法令で、華僑を「アジア外国人」という範疇に入れていた。これは「原住民」と基本的には同等の扱いを受ける「外国人」という意味であった。こうした華僑の地位は、中華民国政府が不平等条約撤廃の交渉に乗り出すなかで、中国人を他の外国人と同等の扱いにしてほしいという中国側の希望によって変更されることになり、1930 年に締結された南京条約によって華僑は日本人や欧米人と同等の「特権享受外国人」という地位が与えられることになった [ルヴァスール 1944:19-57]。

古田は、ベトナム人共産主義者の華僑に対する政策の枠組みとして、「内部問題論」と「絆論」を提起している。まず「内部問題論」は、華僑をベトナム、インドシナの少数民族としての華人として扱う考え方で、ベトナム人共産主義者は、ベトナムの闘争課題に積極的に応えるような政治的忠誠心のありかたを華僑に期待する。それに対し、「絆論」は、ベトナム共産主義者が中国の革命運動ないしは政府との良好な関係を望んだときに、中国人としての華僑に両国間の「絆」の役割を期待して出てくる考え方である。この場合には華僑が、「祖国」=中国とすることを許容し、そのような忠誠心を組織した華僑団体とのあいだの関係を強化することが、ベトナム人の党の役割になると言う [古田 1991:202]。

さらに古田は、フランスと革命側がどのようなカテゴリーにガイを位置づけようと腐心してきたかを描写している。ベトナムの革命側の捉え方も一定せず、ベトナム人共産主義者も、当初はガイを「ヌン」と同一視していたが、実際ハイニンに派遣されたメンバーに華僑が多かった華僑動員委員会のメンバーは、ガイを「華僑」として扱うことによってフランスの「ヌン自治国」の影響から彼らを引き離そうとした。これに対し、再びベトナム人共産主義者の側は、ベトナムで生業を営み田畑を所有している人は「地元の間人」であって通常「ヌン」と見なされており、華僑は土地所有を認められないとして、「ヌン」という範疇にガイを包摂しようとした。古田は「これは、『華僑』の場合には、中国との国際協定によって地位が定められており、中国側の管轄権がおよぶので、それを回避しようとしたためであった」[古田 1992:427]としている。この論理は実はフランスと同じであった。フランスは中国からベトナムにやってくる人々を概して「ヌン」と呼称していたからである。

古田はその後も、中国共産党との関係に配慮しながら、ベトナムの共産主義者たちがガイを革命に動員しようとした過程を描いているが、その政策は「内部問題論」と「絆論」の間を揺れ動くことになる。ベトミン軍の武装宣伝隊が強力な活動を展開していたところでは、ガイ自身が自分たちは「ベトナム人」であるというような状況も存在して

いた[古田 1991:429-430]^{iv}。しかし、1948年から49年にかけて、中国の解放軍が中越の国境地域で、ガイを華僑と認定して、「中国革命の利益への奉仕」を説くようになる。事態は複雑化した。つまり、ガイを「ヌン=ベトナム人」として扱っていたベトナム人共産主義者の方針との間に矛盾が生じたのである。そのため、49年7月に開催された第1連区の代表会議では、「ハイニンのガイに関しては当面国籍問題を提起しない」という方針が出された[古田 1991:430]。さらに、1950年の半ばまでには、ガイを華僑として扱うという決断をした。古田は、この措置を一見譲歩であったが、ガイを「華僑」の範疇に入れることと、かれらにベトナムの抗戦への積極的協力を要求することは矛盾しないと考えた結果としている。当時の良好な中越関係を背景にした決断であったと言えるだろう。

古田の言う「内部問題論」と「絆論」は、前者が「華僑・華人をあくまで国民の一部として統合することを目指す政策」、後者は「華僑・華人を国民の枠組みには必ずしも入れずに、しかし完全な外国人ではない中間的な存在として、中国との間をとりもつ存在として位置づける政策」と言い換えられるだろう。そう考えると、中国との関係が良好であった時にとっていた「絆論」的政策は、中国との関係が悪化すると機能しなくなり、「華僑・華人を国民の枠組みには必ずしも入れない」という前の部分だけが残って存続していくことになったのではなかろうか。つまり、1978-79年を境に、ガイや華人は国民統合の対象ではなくなり、国民の枠組みの外に置かれて排除された存在となったのである。そう考えると、ガイが被った苦難の歴史も理解しやすくなる。

第4章 ガイの歴史—北部華人の生きる場—

筆者は2015年3月に、ベトナム北部バクザン省とタイグエン省において、ガイを対象に歴史に関する聞き取り調査を行った。かれらの民族籍は、実は「ガイ」ではなく「ホア（華人）」となっている。なぜ、彼らは「ガイ」との自己主張にもかかわらず、「ホア」にされているのか。その理由も含めて、北部に居住するガイの歴史を、各個人へのインタビューをもとに、明らかにしてみたい。計15人のガイにインタビューしたが、特にお年寄りの2人のガイと、ガイと近接して住んでいて周囲からガイと思われているキン1人の証言が、対象となる時代も長く詳細なので、最後に参考資料としてつけた。これらを元に主な流れをここでとりあげて、20世紀後半から現在にいたるガイの歴史をまとめる。

ガイは、先ほども触れたように、基本的には山間部に広がった客家系の人たちが、ベトナム山間部にも国境を超えて移住してきたと考えられる。ハイフォンやハノイ、その他の小さな町には、客家系でない華人も多く移住し商売に携わっていたが、山間部に分布して農業に従事している「ホア」と呼ばれる人の多くは、客家系のガイだと言ってよいだろう。かれら自身が、方言差程度の差の客家語を話す商売人の客家たちと自分たちを区別してガイと自称している。移住の歴史としては19世紀末から20世紀前半頃ベ

トナムに入った人たちが多く、ベトナムに来てからの歴史はそれほど古くない。もともとは広東にいたという言い伝えをもつが、確かな歴史はほとんどが広西⁴からクアンニン省に入り、そこからバクザン省やタイグエン省にさらに流れてきている。そして、落ち着き先で農業に従事していた。ベトナムの独立運動が、盛り上がってくると、ガイの中にもベトミンに参加する人が出るようになる。

そして、ベトナムが独立を果たした 1945 年以降、特に北ベトナムが国際的に統治を認められた 1955 年以降は、国家建設の過程で、民族平等の政策が実施され、ガイも多数派キンと同様に、幹部（公務員）になったり、軍人になったり、色々な活躍の場が保証されて、多くの人々がベトナムの一員との意識を持つようになっていた。タム・ジック・クイら本稿の参考資料として付けたガイの証言からは、キンよりも活躍していた地域さえあったようだ。タイグエン省内の北東県に革命の発祥地の一つとして有名なヴォーニャイ県があることもあり、タイグエン省は革命運動が盛んな地であったと言える。そのため、ホー・チ・ミンやヴォー・グエン・ザップなども、武装宣伝隊を率いて早い時期からタイグエン省を訪れており、ガイのなかにも、ベトナム人意識を高揚させて、ベトナム国家のために働くことを誇りとする幹部は珍しくなかったと言える。（タム・ジック・クイやファン・タック・クアイらの証言から、そのような幹部たちの素顔が読み取れる。）

またこれら、中国から移住してきて 2-3 代目の人が多い現在の 70 歳代以上の世代は、漢字を勉強する伝統をベトナム語を勉強することにも転化し、比較的勉強を続けた人が多いため、他の山間部少数民族に比べると、ベトナム語の識字率も高く、幹部に採用される割合も少数民族としてはかなり高かったことが推測される。

にもかかわらず、中越関係が悪化する 1978 年を境に、かれらの境遇は一変した。中国側から華僑・華人、漢族系集団への帰国の呼びかけが始まり、かれらの忠誠心に疑念を抱いたベトナム側も追い出しにかかった。そのため、ガイは、幹部の地位を失ったり、党員は党籍を剥奪されたり、軍隊から追い出されたりし、埋められない喪失感を抱いた。個人には何の咎もないのに、中越関係の悪化を理由に、それまで国家の一員として活躍していたのに、国民ではないとして国家から排除されたための「裏切られた」感覚は、ガイを含め、華人や漢族系集団全体にとつてもない衝撃を与えたと言える。だからこそ、非常に多くの人々が中国へ脱出することを決断したのである。1978-79 年頃に海外に脱出した華僑・華人の人数は、南部の方が北部より多かったと言われるが、それはそもそも総数が南部の方が圧倒的に多かったからであって、割合としては、北部の方がより徹底して華僑・華人の脱出が行われた。南の華人と比較すると、北部のガイたちは国家に「裏切られた」気持ち非常に強い。これは、以上のような歴史的背景があったからこそ、北部のガイや華人の方が、南部の華人たちより、「絶望感」が大きかったからだと言えるのではないか。南部の華僑・華人にとっては、社会主義改造は、資本家などから財産を接収するという共産党の政策としては予想のできるものだったのであり、「やっ

ぱりそうだったか」という感覚で、意外では決してなかったのに対し、北部のガイや華僑・華人は、参考資料として付けた証言から明らかなように、国家に貢献してきた私たちが何でこのような目に遭わないといけないのかという、不条理に対する怒りと絶望だったのである。

そして、実は現在の若い世代に対しても、ガイへの差別は続いている。依然として公安（ベトナムの公安は刑事警察も含む）には決してなれず、公安養成の学校への入学がそもそも許可されない。また軍人や公務員（ベトナム語では幹部という）にも依然としてなりにくい。公務員になれても、集落長どまりである。集落長の給料だけではとても食べていけないので、全員農業と兼業である。また、ベトナムの農村では、都市のように多様な職種はないので、公安、軍隊、公務員への道が閉ざされている、あるいは狭いということは、生活が安定しない、経済的に豊かになれないということも意味するのである。

ベトナムで行われているベトナムの民族政策の特徴の一つは、国家が国定民族を決定し、その分類枠組みに沿って政策を実施することである^{vi}。つまりベトナムは、国民を明確に民族ごとに分類してふさわしい名称を決定し、それぞれに適切な政策を施すことで、諸民族の平等が達成でき国民統合につながると考えている。しかし、特に華人や漢族系住民の場合は、民族分類、民族籍こそが差別を生み出す源になっていると言える。「少数民族政策」として一律に語られがちだが、華人については、他の少数民族とは異なり、国民統合の対象からはずれてしまっただけの期間が非常に長いことを考慮に入れて、歴史を考える必要がある。

今回インタビューに応じてくれた人たちの身分証明書には一律に「ホア」（華人）と記載されていた。多くの人が、「自分たちはガイであってホアではない。『ガイ』と言っても勝手に『ホア』と書かれる。民族名を変えてもらいたいが聞き入れられない」と訴えていた。ガイが都市に住む客家や他の華人たちと自分たちを区別して考えているということは、先行研究でも仏領期から既にあると指摘されていて、現代になってからの新しい現象ではないが、そこに込められる意味には新しい要素があるだろう。つまり、「ホア」であれば華人として差別の対象になるが、「ガイ」と名乗ればベトナムの少数民族の一つとして扱われるのではないかという期待である。

先に、ガイは歴史的に「ヌン」の範疇に入れられていたことがあることを指摘したが、「ヌン」は現在は通常のベトナムの少数民族の一つと位置付けられていて、タイ系のタイ族と近い存在であると認識されており、「ヌン自治国」の成員である「ヌン」とは区別され、かれらに対しては何の差別的な政策も取られていない^{vii}。バクザン省やタイグエン省などでは、ヌンはガイの周辺にたくさん居住している。一時期は漢族系集団に近いとみられていた「ヌン」が、一少数民族として優遇政策を受けているのを、ガイは間近に目にしている。つまり、差別政策が水面下で残る「ホア」ではなく「ガイ」と名乗ることで、「ホア」とは距離を置き、「ヌン」のように一少数民族として認められたい

という願望が、かれらの訴えには込められているように思われる^{viii}。

北部では本稿で見てきたように、民族分類の運用がかなり厳格なのに対し、南部の聞き取り調査では、逆にしぼりが大変緩く、華人と分類されている人たちが、思いどおりに民族籍を変更できているケースも多く耳にしたので一概には言えないものの、少なくとも北部華人が簡単には民族籍を変更できず、そのために現在も公安には入れず、その他公職につくことに制限があり、苦勞している現状は確かで、それを具体的に明らかにできたと思う（後の参考資料参照）。（南部では、華人からキンになる人が激増しているなど、また違った実態があるので、南部華人に対する共産党の政策については、また稿を改めて論じたい。）

第5章 結びにかえて

「ガイは帰らせられた *cho vè*」「ガイだから追われた、追い出された *bị đũa*」と、証言をしてくれた男性のお年寄りたちは、何度もこれらの言葉を繰り返していた。「昔は中国が帰ってくるように呼んだので、多くの人たちが帰った。今はそういうことはしていない。しかし、ベトナムではガイは未だに入党できず、公安や国防関係もダメである。また幹部になれたとしても集落長がせいぜいで、高位の幹部には出世できない」など、差別の実態を訴える声は素直で、口惜しさに満ちていた。国家関係に左右されて変わってしまった自分の人生に対する口惜しさが伝わってきて、大変印象的だった。

これら、国家が実施している制度的差別はもちろん明文化はされておらず、表面化しないので、多数派のキンはほとんど知らず、またキンのなかには実態を認めようとしないう人も多い。しかし、北部のガイの側が、そのように理解していることは確かであり、これまでの経験から、「諦め」のようなものがある。

グエン・ヴァン・チン教授によると、ベトナムの民族学研究所をはじめ、民族に関する研究をしている部門、特にハノイに拠点を置く部門では、華人の研究をタブー視している。チン教授によると、「華人研究にもっと力を入れるべきだ。ほとんど研究されていない」と指摘しても、民族学研究所所長など要職にある人たちの反応は、「もうやっている。必要ない」というものだという。現在の民族学研究所所長は、代替わりしており、筆者が「はじめに」で触れた人物とはすでに別人だが、少数民族の文化人類学的研究が専門の民族学研究所のスタンスは一貫して変わっていないようである。

筆者は、華人や漢族系集団の研究が一種タブー化している理由は、かれらが1978年の華僑脱出や中越戦争をきっかけに、国民として統合する対象と見なされなくなり、現在までその状況が実は続いていることの反映ではないかと考えている。華人研究を進めれば、国際関係の犠牲になったかれらの歴史に触れざるをえなくなり、また現状が依然としてかつての「平等」を取り戻していないことも明らかになってしまい、都合が悪くて取り組めないと推測される。

しかしながら、中国との関係が領土や資源をめぐる極度に悪化してきた現在、華人

や漢族系集団が再び政策の犠牲になって国家関係に翻弄される可能性はないとは言いきれない。政策の犠牲になったかれらの恨みの声は切実であり、次の世代を同じ過ちの犠牲にさせないためにも、かれらの生きてきた軌跡を明らかにすることは大切である。かれらの子供や孫世代はいまやベトナム語しか話せなくなり、独自の文化もほとんど何も継承しておらず、キンとの混血も増えてベト化が進み、中国という国家には何の親近感もいだいておらず、中国の膨張主義に怒るごく普通のベトナム人になっていることを明らかにしておきたい。ベトナム国家が既にベトナムに土着化している華人や漢族系の人々を排除せず、社会に包摂するような平等な政策を、末端の目につきにくいところでも実施していくことが望まれる。

振り返って自身の居住する国家のことを考えると、隣国韓国との関係が悪化するなかで、韓国・朝鮮にルーツを持ちながら日本に居住するいわゆる「在日」の人々への激しい憎悪がヘイトスピーチなどの攻撃的な形で噴出している。ベトナムの漢族系集団への具体的な差別は、国家が水面下で政策として行っているもので、日本で草の根の民間が行っているヘイトスピーチとは単純に比較はできないかもしれない。ベトナムでも中国に対する憎悪は強まっていて、都市で迷って道を尋ねても、中国人と間違えられて無視されるなどの嫌な思いをすることはかなり多くなった。しかし、今回の調査を通じて、同行した複数のベトナム人（多数派のキン）の若者は、様々な差別の例を挙げる年配のガイの証言に対し、「えー、民族は全て平等のはずでしょう」「そんな差別が実際にあるのか」などと驚きの声を上げていた。つまり、理念にとどまってはいるものの、言説の上では国内における「民族平等」は広く深く、多数派のキンに浸透していると言える。その分、まだ日本よりはましなのかもしれない、という思いも一方でもった。

（筆者がインタビューしたタイグエン省やバクザン省では見られなかったが、クアンニンで「ヌン自治国」に組織されていたガイの多くは、1954年の南北分断時に、南ベトナムに移住し、ドンナイ省やホーチミン市に現在居住している。これについても、2016年8月に調査を実施したが、別稿を期したい。）

参考資料（ガイに対するインタビュー）

①P・T・クアイ(P T Quay)^{ix} バクザン省ルックガン県フーニューアン社（社は行政村の意味、自然村を幾つか集めて構成している）コウヴォン集落(Bắc Giang, Lục Ngạn, Phú Nhuận, Cầu Vòng), 1939 年生（インタビュー当時 77 歳、男性）

フランス統治時代、祖父の代に中国の広西から情勢不安定のためにベトナムに逃げてきた。最初はティック(Thích)村というところにおり、その後バクザン省ソンドン府イェンディン社カップゴア集落(Sơn Động, Yên Định, Cặp Ngõa)に移住し、そこから恐らく 1938 年頃にここにやってきて、ここで誕生した。フランスがつくった学校に少し行ったが、3 年生にあがる頃にやめた。

抗仏戦争【1945 年以前のことを言っている】（【 】内は筆者補、以下同じ）の頃は自分は幼過ぎた。父は仏領下では看守（地方の見守りにあたる官）をしており、徴税隊長のようなものだった。

土地改革の時は発動の年は何もなかったが、その後富農で地主と認定された。しかしその後に富農と認定され、また違うとやってやり直し、最後には中農と訂正された。この集落で地主と認定されたのは、結局一人のジン・クーン・フィ(Dìn Coóng Phi)（通称ムイ Múi）という人で、フランス統治下で役職についていた。かれらはその後、3 人の息子も一緒に 1954 年にラムドン省に移住した。サイゴン解放後、フィ氏の息子の一人で一緒に学んだ友達がいたので、生きていますかどうかと思って会いに行った。会えたがその後交通事故死してしまった。一緒に学んだというのは、当時自分の父も役人だったから、何人かでお金を出して、中国から同じガイのソー・サオ(Sở Sao)という名前の先生を漢字を習うために雇っており、1945 年頃そこで彼と一緒に 1 年間くらい勉強したということ。当時は 7-8 歳だった。漢字は難しく 1 年くらい習っただけでは何の効果もなく、忘れてしまった。ターイホー(Tài Hồ)【場所不明】、トゥンティン集落(Thùng Thình、隣のビエンドン(Biên Động)社)、隣のドンコック(Đông Cốc)社、遠くは直線距離で 8 キロ以上離れたゲオ集落(Nghêo、ソンドン県トゥアンダオ(Tuần Đạo)社などの集落から経済力のある家のガイの子供たちが集まって学んでいた。自分は通っていないが、ルックガン県の中心、チュー(Chũ)の街には中文学校が 1978 年まであり、まじめに勉強する子供たちが通っていた。美しい建物だったが、今はない。

ガイのなかにも地主に認定された人はいた。隣のドンコック集落のポー(Pầu)さん。ポーさんの両親は、下のタン(Thân)集落のリー・ザイ(Lý Giai)さんに従って、夜荷物をザイさんのところに担いで来て運ぶということをしていたら、地主にされてしまった。認定は誤っていたが、ポーさんは全ての財産をとられ、その後間違いだったとされたが、彼にはなたと掣しか残らなかった。

仏領下で 1950 年から社のなかのクウヴァン(Cầu Ván)集落（現在社の人民委員会が立地）にある亭（ディン）でベトナム語の読み書きを 2-3 年習った。先生はキンのゲ(Nghê)先生。生徒は男の子たちだけだった。その後、学費を払って、1952-54 年頃 3-4

キロ離れたザービエン(Ra Biên、ビエンドン社)にあった学校へも行った。ビエンドンの学校には、先ほど地主に認定されたと述べたマイさんの娘など裕福な家の女の子も通っていた。

しかし、1954年にフランスが負けて学校はなくなったので、家で農業をした。夜は民主共和国がつくった補習学校へ行かねばならないことになり、また学校通いをした。そのうち合作社の組織化が始まり、ベトナム語の文字を知っているからと、1960年秋から会計の勉強をしに行かされ、戻ってから合作社の会計係をした。1967-69年にかけては社の常務委員、69-74年にかけて社の政治委員をした。1978年以前は何の差別もなかった。年寄りのガイの男性のなかには古い幹部がたくさんいる。当時は入党するのがやり、そういう風潮だった。戦争中はよい仕事をすれば、党からさらに責任を委ねられ、任務を完遂すれば入党が許され、履歴をこまごま調べたりしなかった。当時の党の指導者たちは思慮深く、偏見を持ったりしていなかった。履歴を調べたりするのは、平和な時代になってからやり始めたことだ。抗仏戦争に参加したガイはいないが、抗米戦争に軍人として参加したガイはたくさんいる。1978年以降は、ガイは軍隊には入れなくなった。

1978年多くの人が中国へ帰ったが、自分がかつて社の仕事をしていし、党员だったから帰らず、その後も仕事をつづけた。しかし、県に呼ばれてフォーを食べたが、その後宣伝と教育担当の幹部たちが来て、「中国とベトナムのあいだには矛盾が生まれている。わが党が各同志を誤って入党させた。このように二国間に矛盾が出てきたからには、各同志はしばし休んでくれ」「党組織のなかに君たちがいることは正しくない、もう仕事をしないでほしい」などと言われた。それで党から追い出されてしまった。それで、妻や子にもそのように告げて、それ以後農業をしながらここで生活をたててきた。息子も軍隊へ行っていたが、78年に戻ってきた。

母は父を亡くした後、ゴ(Ngô)家の男性と再婚して、自分とは腹違いの弟を生んだ。この弟 N・M・ハン(N M Hán)は1978年に、妻と息子夫婦、娘など7-8人で中国へ帰った。姉の家族も中国へ戻った。あちらに親戚や知りあいがいたわけではない。当時自分は、悩んだ親戚や友人が訪ねてくると、どこに行ってもどうせ何か足りないと言っていた。当時、ホアは皆落ち着かない状況だったから、少しの間話すとみんな帰って行った。

父方の祖父母はあちら(中国)で生まれたが、自分は今中国へ行ってもどこが故郷なのかわからない。それで、自分はここで実直に仕事をしていこう、きっと自分たちの国家は自分たちを捕まえて牢屋に入れたりもしないだろう、それなら自分は食べていだけで別に問題はないと考えた。こまごました噂が飛び交っていて、自分も怖いと思ったが、どこにいても食べていければよいと思っていた。

この集落から中国へ帰ったのは弟の家族を含め、3戸。弟ハンさん自身は亡くなったが、子供たちの家族は福建省の華僑農場におり、時折電話してくる。遊びに来いと言わ

れていたがもう年を取ってしまったのでいけない。あちらは既に孫の世代がほとんどで、手続きは簡単で証明書を申請するだけだが、こちらは漢字も知らないし中国語もわからないし、行くと迷惑がかかるだけなのはわかっているから行かない。

年をとってから退職制度を知らされたので、現在は（年金のようなものを）もらっている。しかし、かれらは給料の基準も表彰制度も、限られたことしか私に知らせなかったもので、だいぶ損失を被った。私は抗米戦争には大きな功があるのに。

民族については混乱している。フランス時代はガイと呼ばれていた。申告どおりに認められていた。その後ハン（漢）と言われ、1945年にはホアと言われ、その後またハンになり、1979年にはまたホアと呼ばれた。それ以後はずっとホアである。ガイも客家も国家によってホアとされている。自分は正統なガイであってホアではない。ガイ語は知っており客家語もわかる。客家語はガイ語がなまったものである。白話³はできない。1964-65年にバクザン省の民族成分を決める会議があり、自分も参加したが、出たのはカオランとサンチー⁴の話ばかりで、ガイの話は全くでなかった。

自分の子供たちの世代（1960-70年代生まれ）は、小学校の1-3年生くらいまでの学歴しかない。理由は経済的に厳しい時代だったことと、1978年の華人帰国の頃の影響を受けて、学校に飽き、どの子も勉強しなかったからだ。ベトナム語の文字はどうか読めるが、出世した者は全くいない。【ちなみに同年代の他民族は、例えば同じ社内に住んでいるタイーやヌンは、皆最低小学校は出ており、中学を出ている者も珍しくなく、高校を出ている者もいる。】その替わり、子供の世代はガイ語ができる。一方、1980年代以降の孫世代は学歴はある。しかしガイ語は、「ご飯を食べる」とか「学校へ行って帰る」とか簡単な会話を聞くことができる程度でみなあまりできない。幼い時は、自分と妻でガイ語で話しかけていたが、両親とはキン語でしか話さないため、次第にできなくなった。今でもうちへ来たときは「ガイ語を話せ」と言い、ガイ語で話しかけている。キン語を話すと「とっとと失せろ」と怒鳴る。キン語で話すことを許し甘やかしたくない。

民族衣装については、1978年以降は着なくなった。それ以前は普通に着ていたが、今は昔の服も折りたたんで片づけてある。（付属の写真参照。）布地はカオランから購入し自分たちで仕立てていた。前は斜めの布で止める。キレでくるんだボタンがついており、頭の被り物もあった。衣装はホアの服によく似ている。ゴムの黒ズボンを下にはいていた。今は既に縫い手もない。市場に出かける時や宴会の時に着ていた。男性の上着は青色の中国服のようなもので、着ないし古くなり売ってしまった。ズボンは紛失した。

母の兄（既に死亡）が1954年に南に移住し、ラムドン省ドゥックチョンの街に住んでいたもので、抗米戦争が終わってから1978年になって遊びに行ったことがある。しかし、冷淡な対応をされ、礼儀を欠いており、居心地が悪かったので数日で戻ってきた。こちらは客が来たときの食事は、皆で賑やかに食べるが、あちらは台所に降りて食べた

りするなど、既に習慣が大きく異なっており、うんざりした。

儀式の際には、西隣のドンコック社から同じガイのテイクン^{xii}を招く。その他、タンクアン社、タンラップ社にもそれぞれテイクンの会があり、ドンコック社との3社の範囲で、テイクンは呼ばれる。ドンコックのテイクンは全部で8人いるが、どれくらい払えるかによって、5人呼ぶ時も8人全員呼ぶ時もある。儀式は全てガイ語で行う。テイクンは漢字と祭文をしっかりと覚えていないと儀式ができない。祭文というのは簡単ではない。また親族内関係、例えば外孫か内孫かなど、あるいは息子は息子でも本当の子供か養子か、あるいは娘婿かなど、しっかり区別して知っておかないと、祭文を読み上げた時に、各長老から反発を買うことになる。自分は老人会の支部長をしているが、弔辞や亡くなった人の小史をちゃんと知っておき、隅々まで勉強しておかないといけない。テイクンもレベルを保っていないと、皆にバカにされることになる。

私は南部へ行った時に、ホアの葬儀に出てみたことがある【ここで言っているホアとは客家のこと】。自分たちとの違いが見たかったからである。多くはホア語でやっていたが、ガイ語でやっている葬式もあった。彼らの葬儀はテイクンの数も多く、葬式中の儀礼もたくさんあり、テイクンの程度が非常に高かった。しかし、お金の問題もあり、南からテイクンを招いたことはない。北ではテイクンが持参する椅子、机、天幕、舞台装置(背景の絵など)、茶碗や箸まで、南のやり方では自腹で揃えないといけないので、そこまでできない。

ガイは60歳以上になると誕生日祝いをするが、亡くなった日を記念して法事をしたりはしない。また家譜はない。そのため同姓の人でも親戚かどうか、同定できない。同じ集落内に家譜をもっている家はおそらくないと思う。

②**T・D・クイ(T D Quý)** タイグエン省フービン県ドンリエン社ドンタム村(Thái Nguyên, Phú Bình, Đông Liên, Đông Tâm), 1929年生(インタビュー当時86歳、男性)

父は中国人(ガイ)、母はベトナム人。兄弟は男4人、女4人で、自分は次男でリュウサー(Lưu Xá)駅のそば、ザーサン社(現在のタイグエン市フーサー(Phú Xá)区)で生まれた。原籍はクアンニン省と身分証明書に記載されている。母グエン・ティ・T(Nguyễn Thị T)はベトナム革命に参加した人である。キンであったがガイ語を話すことができ、後にガイになった(既に死亡)。自分の妻もキンだがガイ語を話せる。彼女は隣のフービン県の出身で、自分が教師をしていた時の生徒である。

家譜があったのだが、父方の祖父が伯父の一人に持って行った。破壊から守ろうとして、祖母が箱のなかに入れていたが、抗仏戦争時に結局無くしてしまった。言い伝えでは、広東省那良から5代前の祖先が来たという。(現在の広西壮族自治区防城港市防城区にあたる。)祖父はベトナムで里長をしており、父もタイグエンの街に近いザーサン社の里長【村長】だった。1945年には母方の祖父がザーサン社の行政抗戦委員会に入

っていた。

学校は仏統治時代に小学校の4年生まで行った。父がキン人を先生に雇ってベトナム語を習わせた。ザーサン社にいた頃は漢字も習った。ドンタムに来てからも、ハン・ヴィエン・シン(Hàn Viên Sinh)という名前の中国人の先生を父が雇って漢字を習わせたが、身につかなかった。シンさんは中国生まれだったがベトナム共産党の党员で、とても原則的な人だった。あちらへ帰って中国共産党の党员になった。シンさんの息子は、1978年にいったんハイフォンに逃げたが、戻ってきてダイトゥー県タンヴィエット社で、タンヴィエットホア農場で働き、こちらで結婚して子供も生まれた。本人は既に亡くなったが、妻子は農場で今でもお茶を栽培している。その農場にはホアがたくさんいる。

日本軍は現在のタイグエン市の市内に駐屯した。ドンヒーのキンナム市場近くで鉱石を採掘したりしていた。フランスと戦って仏軍兵を沢山殺した。その後飢餓が起こり、タイグエンでも毎日ものすごい数の人が死んでいった。遺体はサボテン区と呼ばれたところに集められ、フランス軍兵が死体を引きずってきて、5・6人ずつ掘った穴に埋めていた。国道3号線のドアン橋の周辺の水路のかたわらにも飢餓で死んだ人がたくさん折り重なっていた。飢餓で亡くなったのはキンがほとんど。ガイは死んでいない。ガイはおかゆをつくりサツマイモを料理して生き延びた。亡くなった人は45年より、44年の方が多かった。

45年にベトミンがやってきた。最初はベトナム解放宣伝隊で、ザップ将軍とホー主席がチュウ・ヴァン・タン大将に会を開かせた。ディンホアで隊を結成し、ザップ氏が大将、タンは上将になった。ドンケー^{xiii}やカオバンを叩いたのはこの隊で後に非常に有名になった。この隊は多くがトー^{xiv}だった。この時期、キンは飢餓で疲弊していて、レベルも高くなく、トーの方が死をおそれず活躍した。ヴァン・ザンやマイ・チュン・ラムといった人たちは大きな幹部になった。

自分は1945年9月2日のホー主席の独立宣言をラジオで聞いた。その頃は、ベトミンに入っていて、中隊の副隊長、ゲリラ小隊の隊長をしていた。その後は、橋や道路の建設などをやっていた。1945年の時点では、ガイはこのドンタム集落にはまだ誰も来ておらず、皆ザーサン(タイグエンの街の一角)におり、自分の内祖父はザーサンの主席【村長】だった。革命の始まりは1945年春だ。私たちは革命の道について勉強しにき、半月刀を握りしめ、白シャツと黒の綿ズボンをはいて活動した。革命の始まりから功をたてたのだ。

戦闘が激しかった1947年頃は、道を破壊する仕事に参加したりしていた。その後1952-54年にかけて、この集落にガイが入植しだした。最初にやってきたのは、ルック家である。そしてその他の一族も続々と入植した。

その後1954年から61年まで、自分は非識字一掃のための平民学務【補習校】で教師をした。ホー主席の言葉に従ったのだよ。その間、土地改革の時に、ここに前からい

たキン人でバクニンが故郷のグエン・ゴック・T(Nguyễn Ngọc T)という地主から、土地、水牛と牛を接収した。通称ルックと言ひ、かれは抗戦地主でフービン県の副主席もつとめていたが、おとなしい人だった。ルックは能力があり、建築請負人や口入れ屋(仕事の仲介業)をしており、彼が雇った労働者たちが、現在のダオ川の土手の道をつくったのだ。それなのに最後には彼を投獄しなければならなかった。彼は1年間服役した。完全に「無実の罪」だった。ルックには二人の養子の娘がいたが、下のルオン(Luong)は父が投獄されている間に天然痘になって死亡した。私たちは地方ゲリラだったから、彼女を埋葬しにいかないといけなかった。ルックは刑務所から出たのち、上の娘のフック(Phúc)と一緒にハノイへ行ったので、わたしたちは彼の土地を社の人々で分けて家を建てた。自分はその時2マウ以上をもらった。その後、合作社が解体した1978年に一部没収されたが、自分は子供が多いという理由で、1マウ強は手元に残せた。

1962年には合作社の検査班長になった。われわれガイは合作社のために本当によく働いた。ベトナム人はそんなに働いていない。行政村レベルでは、キンとガイはほぼ同じくらいの人数がいた。しかし、幹部はガイの方が多かった。かれらは選ばれないし、かれらが我々を選んでいて。おかしいよね。党委員会も人民委員会もみな、われわれガイを選んだ。仕事をするから選ばれるのだ。選ばれると熱心にみな働く。1963年にはこのドンリエン社の郵便局phòngに勤務した。1978年までずっと郵便局で働いたが強制的に退職させられた。党委員会と人民委員会に「ホアはもう働けない」と言われた。それ以後は、並行してやっていた農業だけ続けた。1マウ強の田んぼは子供たちに分配した。自分はもうつくっていないので、今は子供たちが食べさせてくれている。分配は女の子にも平等に分けた。男の子には差をつけている。(息子は合作社が解体した時に分けてもらっているから。)女性の民族衣装もその頃着るのを禁止された。それで皆やめたのだよ。私の母もその時着るのをやめた。

当時ベトナムはホアを追い払っていると言われており、自分も中国に行った方がよいのだろうかと考えた。しかし結局、ベトナムは自分にとってよかった。幹部をしていたから自分には行かなかった。自分にとって中国は父でベトナムは母だった。【実際クイさんの父は中国人、母はベトナム人。】「父が生ませて母が育てる」つまり母親の苦勞が子を育てるのだ。だから自分には行かなかった。ここにいれば、子供たちは経済的にもどうにかやっていける。ただ自分だけは妻を亡くして、家の敷地内でやっていた畑もやる気がしなくなってしまった。87歳【数え年】なのにまだ何かしないといけないのか。

1978年にはこの集落には、全部で20-30戸ほどいたが、そのうち6戸が行った。割合でいうと30%くらいだと思う。行先は広西と福建である。

出国した家は以下のとおりである。【個人情報なので略称とする。】

PHK氏の家(計7人) K氏は合作社の主任だったが出国した。K氏の母が先に出国したため、K氏と家族も後を追った。最初は中国側に渡れずに戻ってきたが、手続きをし直して数か月後に出国した。もともとK氏自身が中国から移住してきた第一世代だ

ったため、帰国の意思が強かった。行先は福建だが K 氏の息子は広西にいる。本人と妻と本人の母、3 人の息子と 1 人の娘が出国した。時々帰ってきている。

TTD 氏の家（計 5 人）D 氏も母が出国をしたがり、全員でついていかざるをえなくなった。行先は広西で、本人と妻、本人の母、子供 2 人が出国した。D 氏は軍隊で工兵をした後、戻ってから集落の共産党支部書記となり、78 年まで全てを仕切っていた。妻も党员で社の婦人会副会長で威信のある人だった。

TKD 氏の家（計 5 人）広西寧明へ行った。TTD の兄にあたり、本人と妻と 3 人の子供が出国した。

LDK 氏の家（計 7 人） 本人の祖母と両親、本人と妻、子供 3 人が福建へ行った。

TDT 氏の家（計 8 人） クイさんの弟、一家で福建へ行った。

THS 氏の家（計 6 人） 合作社主任だったが、福建へ行った。

LQM 氏の家（計 2 人） 近辺のドンバム社の教員だったが、広西南寧へ行った。本人と妻の二人で子供はいなかった。

以上の 6 軒である。

ベトナムに残った人たちも皆、役職を追われ、幹部は全てキンに替わった。それ以後、ガイは重要な役職、高い役職にはつけない。たとえ優れた能力があっても、上に上申した時に懸念を示されることを怖れて、初めから自主規制してガイを推薦しない。だからガイは選ばれなくなった。ここには非常に大きな差別がある。自分の息子も公安になりたかったが結局だめで、水利の仕事をした。以前ほど露骨ではないが、依然として大きな差別がある。出世しないのがわかっているから（大きな幹部にはなれないことがわかっているから）、ガイとの結婚を避けることもある。これは今も同じで、自分の孫たちの世代も同じ状況にある。高校や大学へは行けるようになって、ようやく最近になって入試の時は少数民族としてわずかな加点も受けられるようになり、学歴はキンと同様につけられるようになった。そのため、小さな子供たちや孫世代は外（の世界）に出ていけるようになったが、私企業の経営者にしかなれない。学歴があっても公安になる試験さえうけさせてもらえない。

この場所は最初自分の兄に渡った土地だ。近所のラムさんの家の後ろに広がる土地も、私が土地改革の時に分配され、その後、親戚の P・L・キー(P L Kỳ)にやったものだ。しかしキーは 78 年に福建へ行ってしまったので自分が買った。

弟の T・Q・シン(T T Sinh)は学校も 8 学年まで終え、クオックグーを習い、漢字や中国語もできる。学校を終えてから、クアンイェン士官学校（タイグエン省ダイトゥ市クアンチュウ社 *Quân Chu*）で学んだ。軍隊に入って抗米戦争で戦った退役軍人でもある。かれを含めこの地域からは非常に多くのホアが兵隊に行った。兄の T・T・トゥ(T T Tu)も軍隊へ行ったが南で戦死してしまった。しかし遺骨さえどこにあるのかわからない。その他、兵隊として南へ行った Đ・Đ・ホアさんは、今は車の運転で食べているが、何の書類も申請できないでいる。T・Q・ズンさんも士官だったが、1978 年に帰らせら

れた。自分の若い親戚にも一人烈士がいる。撃たれて死んだらしいが、かれもどこに遺骨があるやらわからない。このように、ホアは非常にたくさん仕事をしたのだ。なのに、1978-79年の事件で、みんな軍隊をクビになった。

1945年から78年までずっと国家のために働いて引退した。9年間フランスと戦った。何年間アメリカと戦ったことだろう。いったいどれだけの功労があったと思うか？あなたはしっかり理解しないとイケない。雑に理解していたら論文はサルみたいになるぞ。年金も全くない、党员も全てクビになった、ルックガン県などと同じように、ガイは集められて中国に帰された、ルックガンのガイは裕福な家庭が多かったが、78年以降、現在の子供世代は、われわれの世代よりずっと貧しくなっている。

広西には妹の孫の結婚式に出席するためなどで、ドイモイ後2-3回行った。ランソン省のタンタインを通り憑祥へ行った。自分の妹は広西の憑祥に嫁いでおり、妹の娘や孫も皆あちらで結婚した。相手は壮【族】である。タンタインでは、少しお金を払い、辺境部隊が通行証を発行してくれて、あちらに渡り、7日間滞在した。憑祥の壮人はガイ語も話せるので、話はできた。国家は7日しかあちらに滞在できないと決めているので、あまり遠くへは行けない。それにお金も十分ではないし。現在国境から離れて中国奥深くへ行くにはパスポートが必要になった。お金がないとパスポートはつけれない。広西と福建に親戚が逃げたが、福建へは行ったことがない。1978年に逃げた人たちは、米国、カナダ、イギリスから清明節の時に墓参りをしによく戻ってくる。

自分のことはガイと思っている。しかしベトナムがホアだという。ホア系ベトナム人だ。もとは中国だけどベトナム人。しかし身分証明書をはじめ公的文書には「ホア」と書かれている。変えてほしいが変えてもらえない。自分の家はもともとは漢(Hán)、同じガイでももともとはヌンの家もある。白話はわからない。自分の子供は男4人女4人だが、ガイ語を話せるのは長男だけ。他は話せない。自分は最も長生きしているだけでなく、頭もはっきりしていて、昔のことをよく覚えている。何も怖れはしない。私は革命をやったのだから。ラムさん【隣人】はびくびくしているから何にもしゃべりはしないよ。

③グエン・フン・C(Nguyễn Hùng C) タイグエン省フービン県ドンリエン社ドンタム村(Thái Nguyên, Phú Bình, Đồng Liên, Đồng Tâm), 1931年生(インタビュー時83歳、男性)

原籍は中越国境のクアンニン省ダイクエンナム、ハーコイ(Đài Quyền Nam, 現在は Quảng Hà, Hà Cối,)で、父の代にハティンからクアンニンに移住したと聞いている。我が家は、ガイでなくキンだ。ハティンでは漁師をしていて、海岸づたいにクアンニンまでよい漁場を求めていった。自分の記憶ではクアンニンでも農業をしていたが、タイグエンの方が広くてより豊かな土地がたくさんあると聞いて、1943年に3人で移住してきた。

3人とは、父の義理の兄弟にあたる人でルック(Luc)家の人と、姉ランである。来た頃はフランス統治下で、何民族かということの問題にされたことはなかった。だから民族の登録などはしていなかった。1945年以降補習学校で7年生まで学んだ。そして、1952年から1977年まで集落の公安の仕事を農業のかたわらやっていたが、自分から辞職した。

長男(1955年生)は、1974年から防空軍に勤務しており、士官学校を出てから、さらにパイロットの技術を学びに、ニャチャンにある防空軍の学校へ行く準備をしていた。そこで起こったのが中国との戦争だった。1979年2月軍隊から追い出されて故郷に戻ってきた。その時同じ中団にいたのは800人ほどだったが、うち長男を含む4人が帰された。残りの3人はバクザン省ルックガン県のガイだった。上は高級将校から下は兵士までだ。この時点で軍隊にはホアは一人もいなくなった。

息子がホアでないことを証明して軍隊に戻るために、祖先について調べにクアンニンに行った。しかし、父の代にクアンニンに移住してからは、周囲の99%がホア【このホアは実質的にはガイ】であるところで暮らすには、自分も彼らと同じようにホアとなった方が都合がよかった。それで、父はホアと届けていたらしい。それですぐにはキン出身だと証明できなかった。やっとクアンニンから証明してもらった書類をこちらに持って帰って提出したが、こちらの幹部はそれっきりで返してくれず、どうなったかわからない。長男ももう年取って軍隊に戻っても仕方ないと言うようになり、それからほおっておいた。結局、長男は軍隊にいたのに年金もなく、あるのは医療保険だけだ。【ただ、長男と孫・ひ孫世代は全てキンとして証明書にも書いている。本人はホアのままにしている。しかし、ガイがほとんどの集落に住んでいるので、周りからはガイと思われる。】クアンニンから一緒に移住してきた姉は、78年に夫とともに中国へ渡り福建へ移住した。

参考文献

伊藤正子(2003)『エスニシティ<創生>と国民国家ベトナム ―中越国境地域タイ族・ヌン族の近代―』三元社、東京

伊藤正子(2008)『民族という政治―ベトナム民族分類の歴史と現在―』三元社、東京

河合洋尚・呉雲霞(2014a)「ベトナムの客家に関する覚書―移動・社会組織・文化創造」『華僑・華人研究』第11号、93-103頁

河合洋尚・呉雲霞(2014b)「ベトナム客家の移住とアイデンティティ―ンガイ人に関する覚書―」『客家与多元文化』(日本客家文化協会)、9期、26-51頁

芹澤知広(2009)「ベトナム・ホーチミン市のヌン族の華人」『フィールドプラス』2号、6頁 (http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/65291/1/field-2_p06.pdf)

西川寛生訳・著(2000)『ベトナム人名人物事典』暁印書館、東京

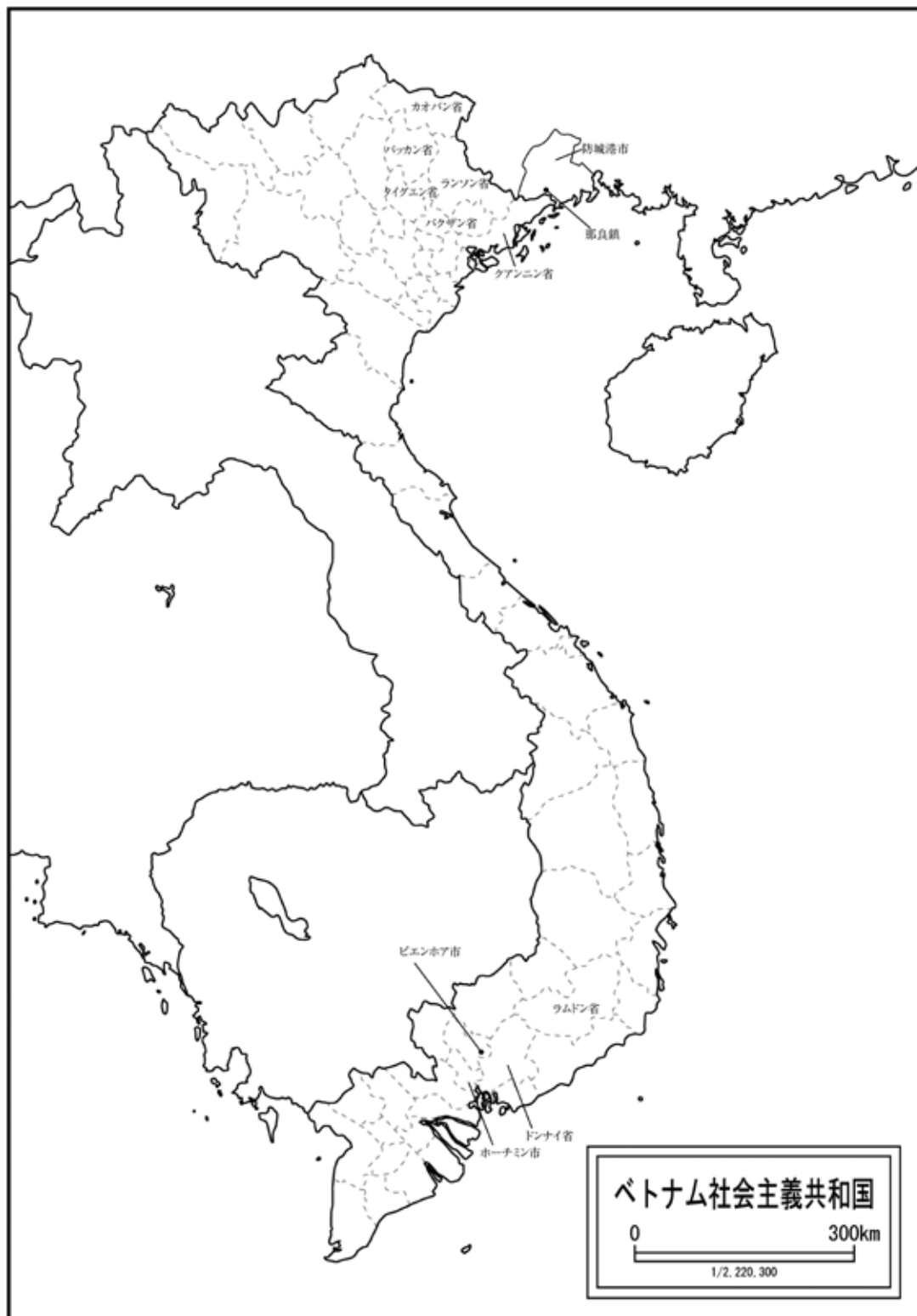
古田元夫(1991)『ベトナム人共産主義者の民族政策史－革命のなかのエスニシティー』
大月書店、東京

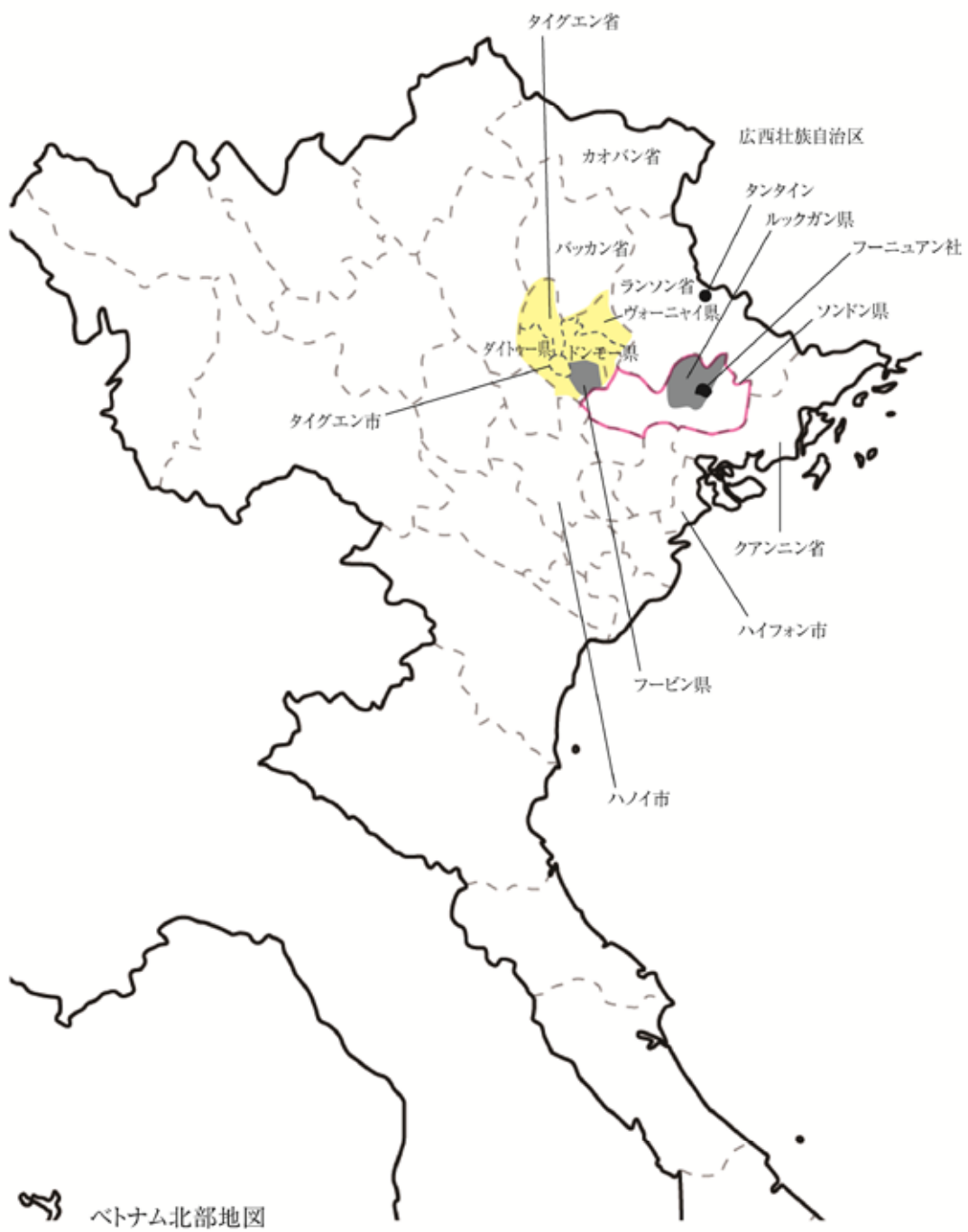
ルヴァスール著、成田節男訳(1944)『仏印華僑の統治政策』東洋書館、東京

Đảng Lao Động Việt Nam Ban Chấp hành Đảng bộ Khu tự trị Việt Bắc(1971), Văn
Kiện của Đảng Bộ Liên Khu Việt Bắc VI, Ban Nghiên cứu lịch sử Đảng Khu tự trị Việt
Bắc,

Nguyễn Trúc Bình(1973), “Các nhóm Hóa và vấn đề thống nhất tên gọi”, Tạp chí Dân
Tộc Học, số 3, tr.96

Việt Bang, Diệp Trung Bình, Thi Nhi(1979), “Người Hoa, người Ngái ở Việt Nam và
âm mưu của chủ nghĩa ba quyền Trung Quốc”, Tạp chí Dân Tộc Học, số 2, tr.6.





ベトナム北部地図

ガイの女性の民族衣装上着



ⁱ 越北連区とは、1949年11月4日にベトナム民主共和国政府によって出された127法令によって設立された行政単位。それまでの1区と10区が合併した17省を含む。17省は以下のとおり。カオバン、バクカン、ランソン、タイグエン、ハザン、トゥエンクアン、ラオカイ、イエンバイ、ソンラ、ライチョウ、バクザン、バクニン、フックイエン、ヴィンイエン、フート、クアンイエン、ハイニン、ホンガイ特区、ホアビン省のマイダー県。Wikipedia Việt Bắc より

(https://vi.wikipedia.org/wiki/Vi%E1%BB%87t_B%E1%BA%AFc)

ⁱⁱ “Tổng kết kinh nghiệm công tác miền núi,” [Đảng Lao Động Việt Nam Ban Chấp hành Đảng bộ Khu tự trị Việt Bắc 1971:339].

ⁱⁱⁱ バ・サン(Ba Sang)の漢字名は黄亜生で、ベトナムでは Vong A Sang (ヴォン・アー・サン) と呼ばれることが多い。

^{iv} このような「ガイ自身が自分はベトナム人である」と主張するような状況は、革命にも参加し1978年まで幹部を務めていたタム・ジック・クイの証言などに、実際に現れている。

^v 河合が指摘する那良の地名を挙げた者もいた。那良が属する広西は、当時広東省に属していた。

^{vi} ベトナムの民族分類政策については、[伊藤 2008]で詳しく検討した。

^{vii} 「ヌン」という範疇の歴史的な変遷や、ヌンをめぐる20世紀の歴史については、[伊藤 2003]を参照。

viii しかし、かれらの願望がたとえかなえられても、政府の水面下の差別政策は消えない可能性が高い。現政権にとっては、「ガイ」はフランスがつくった「ヌン自治国」の成員で、フランスの植民地支配に加担していた者たちであり、「タイー」とともにベトナム戦争時から国家に貢献した人も多い「ヌン」とは、かなりイメージが異なるからである。

ix 参考資料に引用した3人の氏名は、責任ある幹部ではなく一般人のため、仮名とした。

x 広東語の広西方言のことを言っている。

xi カオランとサンチーはベトナムの公定民族の一つであるサンチャイ人のサブグループと位置付けられているが、民族分類決定過程において、すでに別々の民族として分けるべきという議論があり、会議はそれについて地元民の意見を聞くために設けられたものと推測される。詳しくは[伊藤 2008]を参照。

xii 葬式や各種儀礼を行う際、儀式を仕切る呪術師のような存在。漢字と祈りの言葉、各種儀礼の内容を熟知していなければできない。多数派のキンにも各少数民族にも存在する。

xiii カオバン省タイックアン県のドンケーの街は、1950年にベトミンがフランス軍と戦った辺境戦役のなかでも、激しい戦いがあったことで知られる。

xiv トーは、現在ではタイーと呼ばれている。ベトナムの少数民族のうちで最多の人口をもつ。

xv ベトナムの農村では、郵便局は公務員(幹部)の働き口として現在でも人気が高い。ましてやこの時代、郵便局で働いていることはかなりステータスが高いことを意味した。

付記

当報告書で扱った調査は、2015年3月に実施した。その他、JFEの資金により、2015年8月と2016年8月にも以下のとおり現地調査を行った。しかし、内容全てを一つの論文に盛り込めないため、以下の調査の結果については、別稿を期したい。

2015年8月 ベトナム、ホーチミン市にて聞き取り調査と資料収集。華語教育にたずさわっていた教育関係者、華語学校で学んだ経験のある人、また現在専門学校などに通って華語を勉強している華人学生にインタビューを行った。その他、華人たちがつくっている会館を訪問し、特に土着化した華人である明郷会館では詳しく話を聞くとともに、海南華人に個人史を聞き取り調査した。その後、ホーチミン市内のガイの集住地域を訪問して聞き取り調査を行った。最後にホーチミン市総合科学図書館に通って、華人に関する文献資料収集を実施した。

2016年8月 華人が最初に入植したとされるドンナイ省ビエンホア市の古いお寺や市場を回って華人に関する聞き取り調査を実施。その後同省ロンカイン県にて、1954年に北部クアンニン省から移住したガイの集住地を訪ね、聞き取り調査を行った。ホーチミン市に戻って、個人で商売をしている典型的な華人経営者たちから個人史の聞き取りを実施した。中部のダナン市に移動して会館を訪問し、華語教育の実態や会館の活動について聞き取りを行った。またホイアンの街を訪問し、客家や広東人、明郷の会館を訪問して、会館の活動や個人史の聞き取りを行うとともに、会館で華語資料の収集を実施した。